

仙台の民俗芸能・II



1987



愛子の田植踊



手沢の田植踊



大倉の田植踊



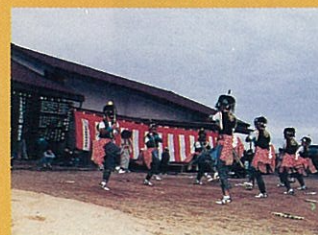
新川の田植踊



下倉の田植踊



川前の鹿踊



川前の剣舞

宮城地区の民俗芸能

宮城地区の民俗芸能としては特に田植踊と剣舞・鹿踊に特色があり、その他にお囃子がいくつか継承されている。

田植踊

わが国は大昔から稲づくりを基本としていて、田遊びとか田楽とか御田植と呼ばれる神事を行っている神社が多い。古い田遊び神事は早乙女踊が主となっていて、江戸時代の中頃から華やかに風流化されてきたとみられる。このような田植踊は特に東北地方に多い。特に、現在仙台周辺に伝えられているものは大別して「弥十郎田植系」と「奴田植系」の二つの系統がある。「弥十郎田植系」には愛子、新川、芋沢、下倉の田植踊があり、「奴田植系」としては大倉の役人田植踊がある。この系統はもと泉市の各地区にもあったという。

これらはもとより、春田植とか初田植、正月田植などと呼ばれ、田の神に稲の豊穰を祈り、聞きとどけてもらおうとする予祝の芸能として、古くから小正月を中心として行われてきたもので、大勢で仙台の城下などにも繰り出してきたというが、今では寒い冬期には踊られなくなった。

早乙女はもと若い男たちが女装したものとされるが、今はどこでも女子たちが踊るようになった。花笠をかぶり振袖に赤いたすきを掛けて広帯を締め、手甲、脚絆、白足袋姿で、踊りにつれて扇子、鈴、銭太鼓などを持つことは、ほぼ同じであるが、弥十郎などと呼ばれる少年などの仕ぐさなどに多少の違いがみられる。

また、田植踊の芸態や、踊りと踊りの合間(中入り)に演じられる芸能には、当時のはやり唄や手踊り、歌舞伎の所作などの芸

風がとり入れられ、その名残りを今に伝えている。さらに踊りの最中に見物の人から踊り子をほめ上げる讃め言葉とその返礼である返し言葉がはいったという。

鹿踊と剣舞について

鹿踊と書いて「ししおどり」と読むこの芸能は、一人立ち八頭立ての長い腰竹を背負った「八つ鹿踊」と、一人立ちでも形態の異つた多頭踊り「仙台鹿踊」の二種類が宮城県内に伝承されているが、どちらも腰につけた太鼓を打ち鳴らしながら踊る型式をとっている。八つ鹿踊は太鼓踊型で、元は旧仙台領内の仙台以北の各地で数多く行われていた。どこの組の所伝も同じように鹿にまつわる由来話を持ち、領主から紋所を賜ったものと伝えられている。その演目には多少の違いはみられるが、どれも鹿供養から発し、先祖の供養に盆や年忌などに踊られ、病魔退散や五穀成就をも祈願して行われてきたものである。

もと八幡町で行われていたといわれる鹿踊と剣舞は、根白石や福岡(泉市)に伝わり、宮城地区には川前の鹿踊・剣舞として伝わっている。この鹿踊は「八つ鹿踊」とは系統を別にした羯鼓獅子舞で、盆の作祭りなどに踊られてきたもので、鹿頭をかぶり、小型の羯鼓を腰につけ、一人立ち六頭から九頭の群舞で踊られ、別に笛と太鼓がつく。

仙台周辺に残る剣舞はほとんど鹿踊と一対になって伝承され、保存団体も同一である。剣舞は悪魔払い、疫病除け、あるいは虫除けを祈るもので、念仏踊から変化したものだといふ。宮城県内でも鹿踊と剣舞が一対となって継承されているところは三団体しかなく、大変貴重である。

愛子の田植踊

代表者 加藤 今朝治

一、所在地

仙台市下愛子字町一八

二、由来と特色

昭和三十五年四月二十三日付で宮城県無形民俗文化財に指定される。

由来は文献もなく明らかでないが、元禄のころ(一六八八〜一七〇三)愛子の加藤某なる人が京都から習得してきたと言いつづけている。同系の各踊組にもそれぞれの由来を伝えているが、互いに交流し影響し合ってきたものであろう。

愛子では大正末期から昭和初期まで中断していたが、昭和五年、仙山線が開通した折、復活し、そのあとまた衰えたが、昭和二十五年に旧広瀬村議会の議決により、村費をもって永久保存を講じ復興している。現在は以前に踊ったことのある主婦たちを中心にして稽古に励んでいる。

三、行われる時期と場所

四月二十九日

諏訪神社境内

四、構成と内容

踊手として、弥十郎(大人の男)二、鈴振り(小学校低学年男子)二、早乙女(主婦)十五、囃子方は大太鼓一、小太鼓三、笛一、唄上げ(女子)二でやっている。もとは岡囃子も付いた。

先ず、庭元の家などで支度を整え、神社まで道中行列を組み、囃子は道太鼓を奏して歩く。神社に着くと神前に横にならび「入端」を二度返して踊ったのち、石段下の広場の特設舞台上に囃子方が並び、その下にごぎを敷き、早乙女たちが白足袋はだしで横一列に並んで踊る。早乙女の衣裳は裾模様のある黒の長振袖に広帯を猫じやらしに下げ、短冊を下げた花笠が冠られる。弥十郎と鈴振りは、ぶつさきの黒い袖広を着し、鈴振りはその上に赤の陣羽織様のものを着ている。どちらも頭に浅黄色の投頭布を冠り、前母衣という化粧回しを付けている。

五、演目

- 1 入端
- 2 手拍子
- 3 鈴拍子
- 4 扇拍子
- 5 銭太鼓
- 6 跳太鼓

踊りは弥十郎の「返して唄うて」の口上に応じて二度ずつ繰り返して踊られる。

踊りによって持ち物が変わる。振りには稲作りの所作が模擬風に芸能化されている。

坂田甚句、塩釜甚句、伊勢音頭、かっぱ、鎌倉、かけて情は、ほかがある。



芋沢の田植踊

代表者 石垣 宏

一、所在地

仙台市芋沢字明神六ノ五

二、由来と特色

昭和三十五年四月二十三日付で宮城県指定無形民俗文化財となる。芋沢は広瀬川の対岸で支流芋沢川流域に位置する。対岸の地区より地味も豊饒で早くから開拓され、中世には国分氏の要地であったことがうかがえる。

この田植踊は昔、京都御所において催され、永正年中、伊達家十三世尚宗公が後柏原天皇の勅裁を得て、年々金子壱両、白米壱石を下賜し城中で踊らせていたもので、仙台築城後、政宗公が城内で踊らせてきたという。のちに吉村公の許しを得て寛延二年（一七四九）一月に国分芋沢要害でも踊り始めたという。

弥十郎、早乙女の背紋の(囀)は伊達家において京の御所から許可をいただいたものだと伝える。

踊り手は昔から、女装した男子が踊ることとなっていたが、現在でもそのまま

男子が早乙女を踊っている。

三、行われる場所と時期

旧二月十九日

旧九月十九日

宇那彌神社祭礼

四、構成と内容

踊り組として、早乙女一〇、弥十郎三、囀子方として大太鼓二、小太鼓一、笛二、唄上げ二、着付三で構成される。田植踊の中の獅子舞の所作は歌舞伎の『石橋』の影響が強く出ている形であり、小さな獅子頭に帯をつけ、早乙女姿で頭に日の丸扇を二枚重ねし、赤毛をたらし、鈴をもって踊る。

弥十郎は七兵衛、八兵衛の面を被り、早乙女は顔に白い口紙（三角）のおおいを付ける。

五、演目

1 三番叟、2 鈴のきり、3 手拍子、4 手拍子、5 扇舞（扇拍子）、6 銭太鼓、7 獅子舞（石橋）、8 上りはか、9 種子まき、そのほか狂言各種。



大倉の役人田植踊

代表者 早坂 利蔵

一、所在地

仙台市大倉字神明前六ノ九

二、由来と特色

昭和三十五年四月二十三日付で宮城県指定無形民俗文化財となる。大倉は、広瀬川支流大倉川流域一帯の山岳地帯で、地名は中世当地を支配した大倉氏によるものと伝える。

今から約百五十年前の天保年間、大倉日向地区に、京都生れの若い源宗という嫌われ者の法印がいて、日向の村人たちは路銀を出しあつて返してやったが、三年後の正月ひよっこりこの地区に姿を見せ、三年前世話になったお札にと、京で覚えたといい踊を手ほどきして立去ったという。

この踊の特長は、弥十郎（役人と呼ばれる一人）の神武天皇と書かれた字を背にし、黒い陣羽織をつける鬼人の所作から始まり、総勢二十人前後で踊りまくる。弥十郎は青い手甲に小太鼓を持ち、早乙女はあでやかな花笠をかぶり、黒地に

白い波兎のはね返し振袖姿といういでたちで、笛と太鼓にあわせて地区の各家の庭で踊り狂ったという。

三、行われる場所と時期

定義如来の夏祭り

四、構成と内容

弥十郎三（内役人一）、早乙女六、大太鼓一、小太鼓一、笛二、唄上げ三、着付四、弥十郎役の長を鬼人（えんぶり）と呼び、日月の引立烏帽子を冠り、背に神武天皇と書いた陣羽織を着て、手に鳴子のついた「えんぶり」を持つ。弥十郎は小さな踊り太鼓と桴を持って踊る。役人田植踊の役人とは鬼人（えんぶり）が農業の神である田の神の役を勤めるという意味であるという。早乙女たちが花笠に長い振袖を着て踊ったり、讚め言葉や返し言葉などがあるのは他の踊組と同じだが、鬼人が唱えるえんぶりの口上や早乙女踊の唄や舞振りに独特の違いがみられる。

五、演目

1 あさはかきり、2 黒川きり、3 鎌倉きり、4 松の葉きり、5 つんばくらきり、6 前の糸の木、7 ひんだにくれ、あがりほか。



下倉の田植踊

代表者 大宮典保

一、所在地

仙台市大倉字下倉五

二、由来と特色

昭和四十六年八月三日付で宮城県指定無形民俗文化財となる。

この踊りは今を去る二百年前の安永年間大倉民部という武将が小倉明神を再建したのち、武運と天下太平、五穀豊穡を祈念する行事として、正月十五日や神社祭典の春秋に住民によって踊り伝えられてきたものである。踊りは念仏踊で、歌の調子も非常に哀調をおびている。

また、以前この地で地芝居が演じられていたことから、元禄の歌舞伎踊とおぼしき坂田踊りや、宝暦年中江戸で大当りをとった中村富十郎の始めた石橋も取り入れてあるなど、古風な振りを保持しているのが特色である。

三、行われる場所と時期

毎年旧九月二十九日に小倉神社社頭において奉納。

四、構成と内容

早乙女六〜七、弥十郎四、太鼓四、笛二、唄手二、着付六。

庭元宅で身仕度をし、小倉神社まで道中囃子で行列を組み、神社に到着し、三間間口の舞台を仮設し、裏に幕を張り、下手に囃子方をたたせて踊る。

また、獅子舞の頭は小さく、左手に持ち、頭から下げた下げ緒を右手で持ちながら踊る。

五、演目

1 しいけい、2 手拍子、3 鈴のきり、4 二本扇、5 一本扇、6 獅子舞（石橋（3番））、7 上りはか。

余芸：坂田おどり、土手のもぐらもち、二十日やみの夜、茶屋のあんころもち、種コ蒔。

囃子：岡崎ばやし、道中ばやし、種まきばやし、東渡名芽、東風ばやし、あわせばやし、大神楽、小神楽、神楽くずし、石橋ばやし、道中行進ばやし、本唄あわせ、はねっこ。

三、行われる時期と場所

旧九月十五日 新川神社例祭

四、構成と内容

早乙女六〜八、弥十郎二、鈴ふり二、唄上げ二、笛二、大太鼓一、小太鼓二、囃子二、着付二。

早乙女は子ども達で、振袖が、花梅模様で、花笠をとって踊る。坂田踊は舞台での終幕の組踊となり、唄い手だけを残り囃子方、着付係等まで全員で舞台に出て踊る。

五、曲目

1 いれは、2 一本そぞろぎ、3 あさはか、4 にあがり、5 とびちがえ、6 から手拍子、7 銭太鼓、8 扇手拍子、9 銭太鼓くずし、10 二本そぞろぎ、11 鈴のきり、12 はね太鼓
余芸：坂田踊、つるのすごもり、はねこ、ささら、その他に讚め言葉、返し言葉も古くから伝わっている。



新川の田植踊

代表者 早坂昭雄

一、所在地

仙台市新川字北野尻三一

二、由来と特色

昭和三十五年四月二十三日付で宮城県指定無形民俗文化財となる。新川は広瀬川の上流、作並川の支流新川流域の盆地に位置する。

この踊りは新川地区に住みついた平家の落人が残したものと伝えられ、室町時代からこの地で踊られるようになったといわれている。

小正月に、その年も豊年万作であるようにと田の神に祈願する予祝の踊りで、部落の全戸を踊り回るものであった。

内容は、踊手が手さしをかけて神前で苗を植える動作を仕組んだもので、三時間にも及ぶ上演種目をもっている。唄は念仏調で、哀調をおびている。

この踊りは、今まで十年から十五年おきにすたれては復活していて、大正の頃までは総勢七十人位も近郷近在に招かれて踊ったという。

川前の鹿踊・剣舞

代表者 庄司成男
庭元 庄子安弘

一、所在地

仙台市芋沢字大竹原三八

二、由来と特色

昭和四十八年十一月六日付で宮城県無形民俗文化財に鹿踊・剣舞一対として指定され、昭和五十一年三月国選択無形民俗文化財となった。

川前は、広瀬川の上流で、貞山公がよく川狩りをされたところである。この地に伝わる鹿踊と剣舞は、共に一対となって伝承されてきた。

鹿踊は昔、稲の害虫が大発生したとき、十頭の鹿が現われてこれを退治し、豊作を導いてくれたことから五穀豊穡の踊とされている。またこれは、仙台城下八幡町龍宝寺より伝授されたものとも伝えられている。

五代藩主吉村が、領内の民俗芸能を一堂に集めて観賞した折、その優美さを賞えて特に九曜星の家紋と絹布の着用を許されたと伝えてきた。

剣舞は疫病よけや虫よけを祈り、念仏供養から変化したものであり、反閨を踏む山伏の行法からその名があるともいわれ、秋保町に伝わる剣舞は「顛拝」と書いている。剣舞も鹿踊と同じく、龍宝寺別当東光院より伝授され、吉村より紋所の使用と絹布の着用を許されたと伝えられている。薬師十二神将の面は、念仏の功力を以って四魔三障の災いを払い、頭にいただく日天、月天、半日の立物は、日月、清明、風雨を表わし、五穀成就を祭るものとされている。

記録によれば天明元年、文政十年、天保十三年、慶応元年、明治四十三年、近くは昭和二十七年と約四十年の間隔をもって絶えようとしているものが復活してきた。

三、行われる時期と場所
かつては龍宝寺の花まつりや盆の念仏供養に踊られてきた。旧の正月、五月、九月には絶対に演じないこととされ、現在は年一回七月七日に、虫干しをかねて演じる習わしとなっている。(庭元宅で)

四、構成と内容
中立、狂、右脇、白銀、女鹿子等の十

三、行われる時期と場所

かつては龍宝寺の花まつりや盆の念仏供養に踊られてきた。旧の正月、五月、九月には絶対に演じないこととされ、現在は年一回七月七日に、虫干しをかねて演じる習わしとなっている。(庭元宅で)

四、構成と内容

中立、狂、右脇、白銀、女鹿子等の十



太刀のきり。

頭が踊手となり、囃子は唄上げ七、大太鼓一、笛三で構成される。

鹿頭の歯と口が軽く動き、カタカタと鳴り、特に体を左右に振る動きが目立つ。

装束は、鹿頭、幕、一尺の小太鼓(腰鼓)、一尺の桴、あや竹、たっつけ、八尺のこし帯、白手ぬぐい、黒足袋、わらじばきである。庭元は代々世襲で、踊子の選出方法なども、その家督に教えることになっている。

〈剣舞〉

一 剣舞、次剣舞、鬼面、からす面などの十面で踊り、山の神面は留守居面として残る。笠廻し二、鐘打二、大太鼓一、唄上げ二、笛三で構成される。

五、曲目

〈鹿踊〉

現行八十三の演目がある。

踊の現行曲目としては、道太鼓、大入端、小入端、鹿の子、廻れ廻れや、松島きり、十七きり、壁越しのきり、大山きり、小歌、燕返しつばくろがえの歌、東見ろ、引き端の唄、案山子舞の歌、我が朝では、がある。

〈剣舞〉

おおいれは、こいれは、南無阿弥陀仏、



伝えたい、伝統の心

宮城地区は広瀬川中上流部、支流の大倉川、芋沢川の流域を占め、総面積の九〇パーセントが山岳丘陵の中にある村々である。一時代ほど前までは、里山で切り出された雑木や木炭が仙台の燃料をまかなっていた。船形連峰から里山に続く山並みはほとんどがこの地区の自然環境の原風景を形づくっており、山の自然と共に生きてきた人々の生活は、常にこの自然と一体であり、お互いに協力しあい、利用しあって今日まで続いてきた。

この地区に継承されている田植踊や鹿踊・剣舞は、この地区の人々の自然とのかかわりの中でより強く生かされてきたものではなく、この他にも今は伝えるものがないなくなってしまった祝福芸の数々。今回、このパンフレットを編集するにあたり、今継承されている芸能も中断と復興を繰り返しているという現実。その復興に力を注いだ人々の心。その心にこたえてきた子ども達、青年団の人々。

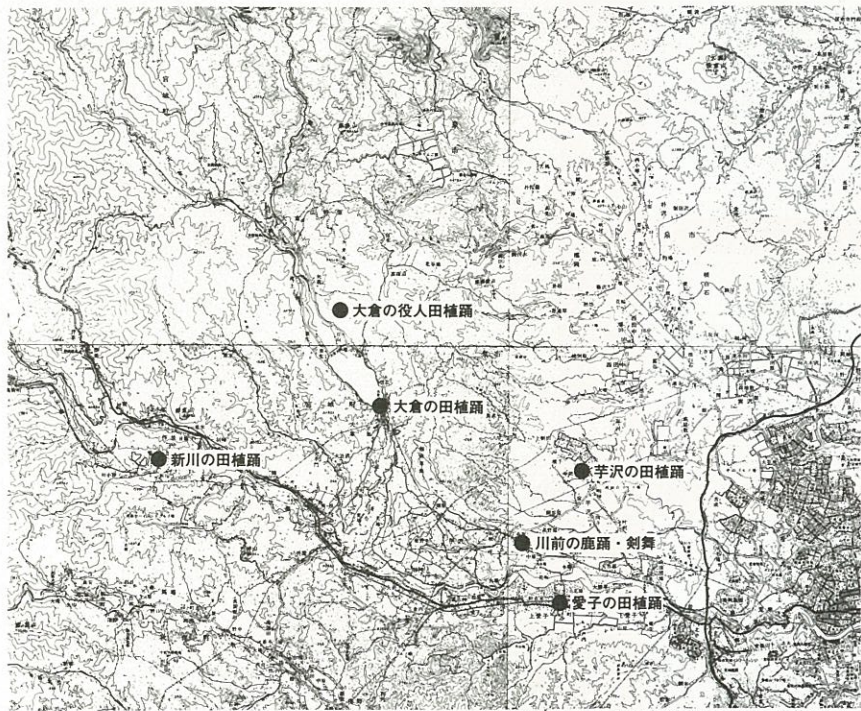
有形、無形を問わず、生活の変遷の中で、

培われてきた生活技術が、次の世代に伝えられていくためには、今日の人々の生活がより豊かで満ち足りたものでなくてはならない。故郷に対する先人の想いを、まさに今確実に伝えていきたい気持ちでいっぱいである。

このパンフレットを作成するにあたり、民俗芸能研究者千葉雄市先生からご教授、ご指導を賜った。また、宮城県教育委員会主催で行われている「宮城県民俗芸能大会」の昭和四十六年から六十年までのパンフレットも一部参考にさせていただいた。

『宮城地区の民俗芸能一覧』

地域名	分類	種別	名称	状況
上愛子	田楽	田植踊	愛子の田植踊	活動
日向	〃	〃	大倉の役人田植踊	〃
新川	〃	〃	新川の田植踊	〃
芋沢	〃	〃	芋沢の田植踊	〃
大倉	〃	〃	下倉の田植踊	〃
〃	〃	〃	大手門の田植踊	〃
〃	〃	〃	作並の田植踊	〃
〃	〃	〃	定義の田植踊	〃
芋沢	念仏系風流	仙台鹿踊	川前の鹿踊	活動
愛子	〃	〃	本木の鹿踊	活動
芋沢	〃	仙台剣舞	川前の剣舞	活動
熊ヶ根	風流	〃	熊ヶ根おかばやし	〃
大倉	〃	〃	日向の囃子	〃
大倉	祝福芸	囃子舞ほか	大沢願人踊	〃
大倉	〃	〃	日向やすとこ	〃
大倉	〃	〃	愛子願人踊	〃
大倉	〃	〃	愛子やすとこ	〃
大倉	〃	〃	定義やすとこ	〃
芋沢	〃	〃	芋沢願人踊	〃
大倉	〃	〃	下倉歌舞伎	〃



地形図は建設省国土地理院発行の5万分の1を使用した。

